亞炭香報

亜炭広報社
編集人　伊達伸明

第二号

平成二十四年
九月三十日

時代の証言 続々と

アンケート展示「亜炭香堂」オープン

亜炭香堂の壁に現われはじめた「記憶の亜炭層」。アンケートから抽出された文言がビッシリ並ぶ。

マチナカアート・2012「亜炭香古学」の展示に合わせて実施された、亜炭と暮らしに関するアンケートが先日しめ切られ、貴重な証言が多数寄せられた。28日にオープンした亜炭香堂（いろは横丁内＝10月28日までの金土日）に展示されている。

火がつきにくい

亜炭が使われなくなってから50年近く経つため、集まったコメントのほとんどは子供の目から見た風景だ。そんな中、最も多かったのはやはり焚き付けの苦労話。「まず新聞紙や杉の葉に火をつけ、次に『せいはん木』などの木っ端を入れたのち最後に亜炭に火を移して沸かす」のが基本手順だが、一般家庭の風呂の事情はさまざま。寒い冬などは「内風呂でも焚き口は外。兄弟で当番があり、小さかった私には涙の日々でした」。なかなか火がつかない上に大量の煙が発生するため、「目が痛くなり、すすけて顔が真っ黒になることもありました」。

ダルマストーブ

学校での思い出としてダルマストーブを挙げる例も多い。こちらもほとんどが当番制だ。「朝から1日かけ近くの林に杉の枝葉を取りに行き、葉は家から持ちよった炭すごに入れ、枝は束ねて男子生徒が入れて学校に持ち帰った」「ストーブ当番が回ってきた日には、家から焚き付け用の細木を一束ぶら下げて登校したものです」「当番の時は亜炭

丸光の「荒城の月」とたなびく煙

平成の現代から見ればけっして扱いやすいとはいえない亜炭だが、遊びの天才である子供たちにとっては格好のお楽しみ素材。手斧で小割りする際に木目に添ってきれいに割るのが楽しみだったり、追廻住宅のはずれにあったボタ山で暗くなるまでソリ遊びをしてズボンに穴を開けたり。そんな子供たちに刻を知らせるのもまた亜炭。各家庭でいっせいに夕食の支度に取りかかるため、あちこちから黒い煙が立ちのぼり、独特の香りが市中に漂った。

「当時丸光デパート（現在はさくら野百貨店）では夕方5時に荒城の月のチャイムを鳴らしていましたが、

火の扱いに慣れ

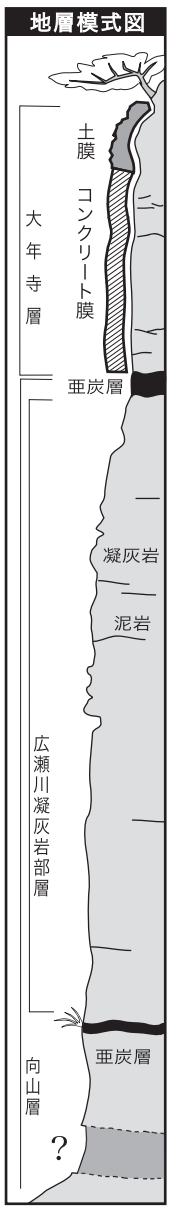
小屋からバケツで持ってきて、ナタで小さく分けます。板状に割れた記憶があります」。しかしここでも焚き付けは波乱含みで「当番の生徒によって上手下手があるのか、朝会のあと教室に行くと、煙で話が出来ないことがあった」。その一方で、「いやな先生の授業の朝は、わざとうまく燃えないように教室中をいぶして『とてもこれじゃ授業にならないよ』と、授業をつぶしたこともありました」というツワモノも。

上手な人は

屋外でのたき火のように囲うものがないと火付きは悪いが、ある程度火床ができるまで亜炭を入れてフタを閉め、そのあと火を入れれば一気に燃え出すという証言もある。「杉の葉がパチパチ燃えている上に亜炭を置くと、わりと簡単に火がつきました。石炭ではこうはいきません。亜炭は石炭より軽いし粗いし、燃えやすいのです」。

燃料手当で配給

入手方法に関しては、近所の燃料小売店（薪や練炭、豆炭なども販売）や、三本木などから売りに来る店からトラック1杯単位で購入することも多かったようだが、中にはこんなケースも。「父が公務員だったので、小学生の頃は官舎に住んでいました。1年に1回燃料手当として亜炭の配給がありました。当時の軽トラ1台分の亜炭が家の前に山積みされ、それを家族で外の風呂場と納屋に運びました。夕方暗くなるまでかかって運んだものです。いい時代でした。当時は家族の年間行事のひとつとなり、今でも毎年秋になると、秋の夕暮れと亜炭の香りが思い出されます。」



青葉城址　東側法面補修

東日本大震災で一部表土が崩落した青葉城天守台東側の崖面上部で補修工事が行なわれている。以前は木や表土に覆われて見ることが出来なかった亜炭露頭が、今なら追廻テニスコート側から観察できるとあって、地質資料の保全の観点から動向が注視されていたが、徐々に上部からコンクリート面がせまってきたため関係者が憂慮していた。

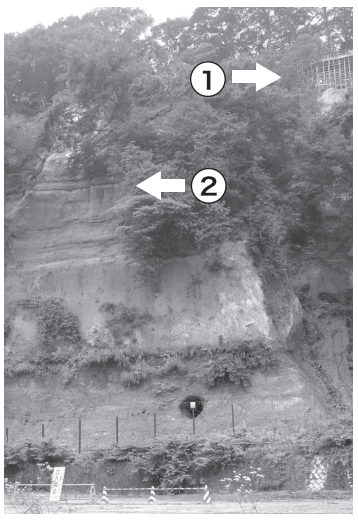
露頭　一部見納め

大年寺層

青葉城公園整備室によると、今回の補修工事で覆われるのは崩落の危険が高い最上部10メートルほど。大年寺層と呼ばれる第三紀鮮新世の堆積層の一部で、ここに含まれる亜炭層が良質な青葉山亜炭を産み、燃料史に一時代を築いてきたが、この層より上の法面が今回の補修の対象。亜炭層自体がもろく崩れやすいことを考えると、今回で見納めとなる公算が高い。

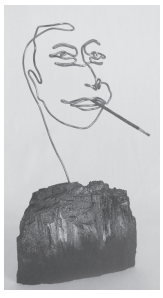
作業は今後、該当面の下部8メートルに植物の着生が可能なコンクリート膜、上部に土膜を設置し、そこから植物を下垂させて景観への配慮とする予定。

また、下部亜炭層と近いため一部で採掘口かとうわさされていたナゾの穴（写真中央下）は、3メートルほど奥に入ったところで行き止まりとなっており、試掘坑の可能性は残るものの、現時点では戦時中の防空壕と推測されている。



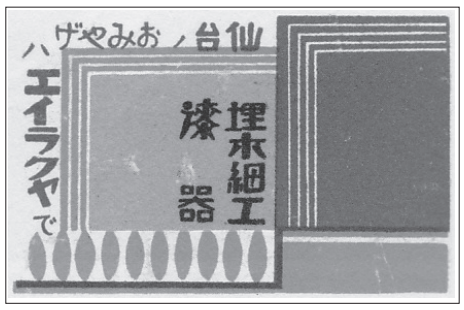
矢印1が作業中の工事の足場。2が亜炭層。ナゾの穴には立入禁止の札がかかる。

亜炭おやじ登場



亜炭香堂の目玉の一つが青葉山亜炭を配合した線香だが、先頃専用の線香立てがお目見えした（写真）。針金製の中年男性の頭部で、口がクリップとなって線香をくわえる仕組み。どの角度から見ても立体的な顔に見え、微妙に表情が変わるのも不思議な魅力。台は同じく青葉山産の埋木。埋木細工の定番「仙台鷹」の台と同じように表面のワレを岩肌に見立てた重厚な作りだが、上半分が脱力感満点で、なんとも不釣り合い。しかし亜炭と埋木が一体となった造形物は前例がなく、そのタイミングがちょうど亜炭の煙が立ちのぼるのと同じ頃だったのでとても印象に残っています。亜炭といえば音とにおいが一体です」という声もあった。

亜炭香堂では、会期中も来客から聞き取れた証言を上書き展示していく予定。



しかも一応は香台として使えることから早くも注目を浴びている。

会期中は入口横の窓際に常設展示されることになっており、希望があれば勝ち誇ったような顔で紫煙をくゆらしてくれるそうだ。担当者によると「名前はまだない」が、公募するかどうかは未定という。

亜炭香報は、せんだいマチナカアート2012「亜炭香古学〜足元の仙台を掘りおこす」《企画制作／伊達伸明，主催／仙台市，（公財）仙台市市民文化事業団（事業課 022-301-7405）》の活動の一環として発行されています。

本紙の編集及び「亜炭香古学」開催にあたって下記文献を参考にしました。引用資料として書籍広告風に掲載し、謝意と敬意を表します。

鉱害（陥没事故・赤水）からの復旧資料

非売品

三本木亜炭
鉱害復旧事業記念誌

編集発行人　三本木町長　今野元治郎

989-6321
宮城県志田郡三本木町
三本木字西沢34
TEL 0229-52-2111

石炭及び亜炭
鉱害復旧事業の歩み（追録）

編集・発行　常盤鉱害復旧連絡協議会

いわき市平字菱川町1-3
石炭鉱害事業団常磐支部内
TEL 0246-25-9261

創業370余年の信用と伝統に
新しい技術を誇る

石油、石炭、亜炭、薪、コークス、豆炭、ゴミ
何んでも焚ける！

タゼン式 新型 風呂釜

昭和四十四年版 取扱説明書

タゼン式新形ボイラーは構造品質ともに耐久性に富む様に出来ている上銅板の品質は、特に純度の高い一流メーカーの最優良品を使用し接合分は純ロー付と云って総て真鍮で溶接してありますので、水質が悪くとも、また少し位の空焚きをしても水漏れしない堅牢な最優良品で永年の使用に耐えます。

慶長元年　昔からの銅屋　創業370余年
株式会社 田善銅器店
営業所　仙台市柳町69　TEL(25)-6857(代表)
厨房センター　仙台市柳町7　TEL(27)-0703

台古図 仙懐地

仙台市市制120周年記念誌

約100年前に作られた詳細カラー地図「仙臺市全圖」を30エリアに分割・拡大し、現在の地図と見比べられるように構成しました。写真・図版も多数収録。

一〇〇年前の仙台を歩く——
仙台地図さんぽ
小さな驚き、大きな発見。一〇〇年前の仙台を散歩してみませんか？
大正元年大判マップを付録！
●定価　2300円（税込）

【発行】せんだい120アニバーサリー委員会
（有）イーピー風の時編集部+（株）プレスアート
TEL 022-295-9568　FAX 022-295-9570

仙台市博物館の出版物

広報紙
せんだい市史通信
A3二ツ折　フリーペーパー

機関誌
市史 せんだい
A5判　定価 500〜900円

仙台市博物館 市史編さん室
仙台市青葉区川内26番地　仙台城三の丸跡
TEL 022-225-3074　FAX 022-225-2558

杜の都の都市文化継承誌
仙臺文化
Sendai Bunka
2005年11月 第2号

■仙台の工芸
埋木細工〜その実用のかたち
■マッチラベルで見るカフェ・バー
見つけた！仙台の昭和モダン
■仙台人追慕
ピッケル一筋　山内東一郎
■仙台の乗物
"銀バス"は街のマスコット
■仙臺市寫眞帖を開く
重厚な県図書館
モダーンな市公会堂

定価 700円（本体667円）
【発行】仙臺文化編集室　宮城県仙台市太白区緑が丘
【印刷製本】ハリウコミュニケーション株式会社

※連絡先等の引用は奥付のまま　／「エイラクヤ」広告は「仙臺文化」第8号より転載